

日本語版への推薦文

ピーター・ポマランツェフの『ブーチンのユートピア』(Nothing is True and Everything is Possible)は、二一世紀の最も重要な書物のうちの一冊である。現代ロシアにおけるテレビを用いたプロパガンダの本質と効力について、研究者にも広汎な読者にも理解を促すという点では、比肩すべき書が見当たらない。それだけでなく、本書は、種類によつてはそうしたプロパガンダがロシアの内外を問わず、効果を發揮する理由についてのすばらしい発想を伴つた省察であるし、それを裏打ちしているのは個人的な豊富な体験と表現は控えめながらも深い学識の両方から得た情報である。

ポマランツェフ自身が本書で予言していたように、彼が本書で記したロシアのなかの「状況」たるや、今やロシアの国境の外にまであふれ出している。その意味からも、本書は近い過去に対してだけでなく近い将来に対する道しるべでもあるのだ。

二〇一八年三月四日

テイモシー・スナイダー

〔追記〕

テイモシー・スナイダー教授は自著「暴政」(On Tyranny)原著・翻訳とも二〇一七年)の第九章「自分の言葉を大切にしよう」のなかで「何を読めばよいのか?」への答えとして、最新のものとして本書を挙げている(訳書においては五九頁を参照)。

ブーチンのユートピア
◇ 目 次



日本語版への推薦文 テイモシー・スナイダー
i

第1幕 ロシアのリアリティー・ショー 1

幕が上がる 2

「固定観念にとらわれていない」 10

今どきのヒーロー 25

今日のロシア 47

『ハロー・グッバイ』 68

創造の高み 86

第2幕 クレムリン・マトリックスの裂け目 103

幕が上がる 104



もう一つのロシア

入門儀礼

真夏の夜の夢

166 151 137

第三幕 さとまごまな精神錯乱

幕が上がる

ソ連崩壊後のロシアのセクトの略史

「ザ・コール・オブ・ザ・ヴォイド」(頭の中で飛び降りちやえと喚す声が聞こえる……)

オフシヨア

みんな嘘だし何でもありや…… (Nothing is True and Everything is Possible)

訳者あとがき

311 295 261 246 230 180 179

凡例

- 1 著者の経験の生々しさがいちばんよく伝わるだろうと考え、底本は翻訳権取得時にポマランツェフ氏のエージェン
トから提供されたものとする。
- 2 底本出版後のロシアのいろいろな次元（ウクライナ情勢、経済、内政、社会、メディア……）でのめまぐるしい展
開、モスクワの著しい変貌ぶり、さまざまな情報の更新も個人的にフォローしているが、本訳書に盛りこむことは
していない。
- 3 著者による重版時などの書き換えや書き加えも翻訳に際して目を通して参考としたが、本訳書の訳文には反映させ
ていない。
- 4 加えて、以下のこともお断りしておく。訳註代わりに訳文に多少の補いを入れてあること。訳文では「私」と「わ
たし」を併用していること。正教会に関わる用語は「痛悔」「生神女マリヤ」なども用いているが、使用にあたって
厳密なルールは設けていないこと。リアリティー番組とリアリティー・ショーとの差を著者がつけていないので、
訳はリアリティー・ショーに統一したこと、などである。

第1幕

ロシアのリアリティー・ショー



幕が上がる

夜間にモスクワ上空を飛行すると、この都市がクレムリン宮殿を真ん中にした小さな環と、その周りを同心円状に幾重にも取り巻いている環状道路によって形作られているのがわかる。二〇世紀も終わろうとする頃には、それらの環から発せられていたのは、かすんだ、ぱっとしない黄色い光だった。モスクワはヨーロッパの端にあるうらぶれた衛星都市で、ソヴィエト帝国の残り火が目に映るだけだったのだ。それが、二一世紀に入ると何かが生じたのである。ずばりマネーである。これだけ多額のマネーがこれほど短い期間にこれほど狭い場所に一気に流れこんだ例はなかった。環状道路網にも変化が生じた。同心円状の環がこの都市の空高く輝き始めたのだ——新たに建てられた超高層ビル群やネオンに、道路を疾走するメルセデス・ベンツ・マイバッハのライトも加わり、めくるめく夢に誘いこむサーカス広場のようなまばゆさを発してぐるぐると回転するようになったのだ。ロシア人は新たなジェット族ジェットになった。世界でもっとも金持ちで、もっともエネルギーギッシユで、もっとも危険なジェット族に。世界でいちばんたくさんの原油を握り、世界でもとびきりの美女たちを待たせ、世界でも比べるものなく豪華なパーティーを催している。隙あらば何でも売っちゃまえと身構えていたのが、今では何でも買ってやろうと手ぐすねを引いて待っている。ロンドンのサッカークラブから、ニューヨークのバスケットボールチーム、美術品のコレクション、イギリスの新聞社、ヨーロッパのエネルギー供給会社まで、それらどれもこれも複数をとまるのだから。彼らのことは誰も理解できな

い。彼らは下劣にして上品、狡猾にして単純だ。モスクワにいなければ、この連中について納得などできない——急速な進歩に見舞われていて、移ろいの速さから現実感というものがまるで失われてしまっているこの都市、青二才が一瞬のうちに億万長者に成り上がるこの都市にいなければ納得するなど無理だ。

「パフォーマンス」がこの街のキャッチコピーであり、パフォーマンスの世界では、ギャングがアーティストになり、ゴールドディッカー（金持ち目当ての女）がプーシキンを引用し、^{ルズヴェンシュテルズ}暴走族のロシア版はラリッて自分たちを聖者^{セイント}のように立派な人間だと錯覚してる始末だ。猛スピードの発展のなかでロシアは、共産主義からペレストロイカ、ショック療法、貧困、オリガルヒ、マフィア国家、そして超のつく大富豪に至るまでのじつに多くの世界をえらく足早に見てきたから、ロシアのニューヒーローたちは、人生は一度きりのきらびやかな仮面舞踏会であり、そこではいかなる役割や地位、もしくは信念さえも移ろうものだという感覚を持ち続けてきた。「これまで世界に現れたあらゆるペルソナをかぶってみたいんだよ」と僕に語ったのは、ヴラディーク・マムシェフ・モンローだった。彼はパフォーマンス・アーティストであり、この街のマスコミ的存在で、招待客として欠かせぬ実業界・官界の大立^{ダイクレン}て者とスーパーマデルが出席するパーティーには、必ずゲストとして呼ばれる。パーティー会場には、ゴルバチョフや、パラモンの行者、ツタンカーメン王、ロシア大統領などに仮装して出かける。僕が初めてモスクワの地を踏んだとき、こうした七変化でも数え足りない仮装が、ロシアという国が自由になったし、^{し、だ}と思ひこんだ。自由になったことに浮かれてさまざまなコスチュームを身につけ、「創造の高み」と大統領の宰相^{ツァスル}のウラジスラフ・スルコフが評するレベルまでパーソナリティの限界を押し広げていた。僕が、これらのはてしない変化は自由になったしるしではなく^{ディリリアム}精神錯乱なんだと思うようになったのは何年も経ってからだ。その精神状態のなかでは、怖い顔つきの傀儡^{くわい}たちとか悪夢を描きだす神秘主義者たちが、自分たちのことをあたかもリアルな存在だと信じこむようにな

り、大統領ワシントンの宰相がいつも「第五次世界大戦、万人の万人に対する初めての非線形ノンリニアの戦い」と呼んでいるものに向かって突き進んでゆくのだ。

おっと、僕は先走りしてしまっているな。この本の先の方にみな出てくるんだ。

僕はテレビ業界で働いている。事実を扱ったテレビ番組を制作している。厳密に言えば、事実に基づくとしたエンターテインメント番組だ。ほかのものと同様にテレビ業界も急成長していた二〇〇六年に、僕はモスクワに飛んだ。この国自体には大学を卒業した翌年の二〇〇一年から馴染みがあった。ほとんどロシアで暮らしていたし、そのあいだに仕事を転々とした。いくつかのシンクタンクに勤めたし、また、かげだしの端くれコンサルタントとしてロシアの「発展」を支援するためのEUのプロジェクトにも関わった。それから映画学校に入り、西側のテレビネットワークのためにドキュメンタリー番組の制作助手を務めていたところだった。僕の両親は一九七〇年代に政治亡命者としてソ連からイギリスへ移住した。僕はエミグレのそれも庶民的なロシア語を使いながら大人になった。だけど、僕はロシアではいつもちょっと立ち寄った観察者でしかなかった。もっとロシアに近づきたかった。ロンドンでは整然としていて目新しさがないし、亡命した僕の一家が住むアメリカは満足し切っているように思えた。一方、実際のロシア人はじつに生き生きしているように思えたし、何でもありだと感じていたように思えた。僕が本当にやりたかったことは映像の制作だった。「録画」ボタンを押し、あとは自動露出だ。僕の鞆には、どこにでも持ち歩くのに手ごろな年季の入ったソニー製ビデオカメラのZ1が入っていた。僕はロシア社会で起きることを見逃さないよう多くの時間を撮影に費やした。こんな登場人物たちは二度とつかまえられないとわかっていたので、やみくもに撮影した。それに、生まれ変わったモスクワでは、「ロンドンから来ました」という呪文を唱えられるというだけで需要があった。この呪文は「開けゴマ」のようによく効いた。ロシア人は、ロンドンっ子は儲かっているテレ

ビ局の錬金術の謎を知っていて、それを使って必ず人気が出るリアリティー・ショーかスター発掘番組を制作できる……そう信じて疑わなかった。たとえ僕が西側の番組制作ではいちばん下つ端のADでしかなくても、「ロンドンから来ました」とささやくだけで、出席したい会議には出席できたのだ。僕は、ロシアに向かった「西側文明」という名の無敵艦隊に潜りこんだ密航者だった——成功を夢見てグローバル化の海へと冒険に乗り出した銀行家、弁護士、国際開発コンサルタント、会計士、建築家などからなる無敵艦隊だ。

けれども、ロシアでは、テレビ業界で働くことがたんなる撮影者とか観察者以上の意味を持つ。国土が九つの時間帯にまたがり、世界の大陸の六分の一を占め、東は太平洋から西はバルト海まで、北は北極圏から南は中央アジアの砂漠地帯にまで広がるこの国では、今も人々が木造の井戸から腕の力を使って水を汲み上げるような中世さながらに取り残された村落があるかと思えば、工場城下町がある。そして生まれ変わったモスクワに戻れば、青いガラスと鋼鉄でできた摩天楼が並んでいる。テレビこそ、この国を一つにまとめ、支配し、団結させることができる唯一の権力だ。二〇世紀の権威主義オールドリアイズムよりもはるかにとらえどころがない新しいタイプの権威主義の中枢となる機構である。そして、僕は一人のテレビプロデューサーとして、まっすぐにその仕組みの中心部に入ってゆくよう仕向けられることとなる。

僕が最初に会議に出たのは、オスタンキノにある放送ビルの最上階だった。このテレビジョン・センターは、サッカー場五つ分の広大な面積の敷地を持ち、ロシア政府のプロパガンダ活動のための強力な攻め道具になっている。放送ビルの最上階に到着し、つや消しの黒い色をした廊下を何回か曲がりながら先に進むと、細長い会議室がある。そこでモスクワでもいちばん見かけ倒しの人間たちが一堂に会して週一回のブレインストーミングの会議を開き、今後の放送内容を決めているのだ。僕は愛想のいいロシア人の出版業者に案内されていた。僕の姓がロシア人のものだったため、僕がイギリス人だということは誰にも気づかれていな

かったし、僕もそのことについては触れないでおいた。会議室には二〇人以上が集まっていた。白いシルクのシャツを着てよく日焼けしたアナウンサーたち、ひげが汗ばみ息づかいの荒い政治学の教授たち、スニーカーを履いた広告代理店の重役たち。おや、女性はいないな。全員が煙草を喫っている。あまりにも煙たくて、肌がむずがゆくなる。

テーブルの端には、この国できわめて有名な政治番組司会者が着席していた。背が低く、しゃがれた声の持ち主であり、早口でまくしたてている。

私ら皆が、ちゃんとした政治など今後も期待できないことは知っているさ。それでも視聴者には何かが起こっていると思わせなければならぬんだ。連中は楽しませ続けてやらねばならぬのだ。それで、今度は何をひねくりまわせばいいのかな？ オリガルヒを攻撃しようか？ さて、今週の敵は誰にしようか？ 政治はそれこそ……映画のようでなくちゃならぬだよ！

現大統領が二〇〇〇年に政権を握ったとき、最初にしたのは、テレビ局を管理下に置くことだった。クレムリンが、「衛星政党」として認めるにはどの政治家がよいかを決めたのも、この国の歴史がどうあるべきであり、何を恐れるか、どんな意識を持つべきかといったことを決めたのも、テレビを通じてのことだった。生まれ変わったクレムリンは旧ソ連の二の舞を演じるつもりはなく、二度とテレビ番組を退屈なままにはしない。そのためになすべきことは、ソ連時代の統制を西側のエンターテインメントとうまく融合させることだ。二一世紀のオスタンキノのいくつものテレビ局は、ショービジネスとプロパガンダを混ぜ合わせ、視聴率オーディエンスリアシメントと権威主義とを結びつけている。そして、偉大なショーの中心にいるのは、大統領自身だった！ 彼は無

名の人物から生み出された。パフォーマンス・アーティストと同じくらい素早く、兵士、愛人、裸の胸の筋肉を誇示したハンター、ビジネスマン、スパイ、皇帝、スーパーマンといった役割のなかを変化（へんげ）できるテレビの力を通じて、陰鬱な元KGBから生み出されたのだ。「ニュース番組つてのは大統領へのへつらいさ。プーチンの行動を祝福し、奴を偉大な大統領にするタネさ」とは、テレビプロデューサーや御用政治学者たちが好んで口にするところだ。煙草の煙が充満した部屋にいるうちに、どうも現実というものは融通が利くようだと思うようになり、「テンペスト」の主人公で魔術師の）プロスペロと一緒にいるような気までしてきた。ここにいるのは、自分たちの望むいかなる存在も、ソ連崩壊後のロシアのテレビ画面に映し出せるプロスペロたちだ。だけど、僕がロシアで働いているあいだにも、年を追うごとにロシア政府が誇大妄想的になっていくのに合わせてオスタンキノの戦略もどんどん歪曲されて、これまでになく緊急なものとしてパニックと恐怖を煽る必要があると考えられるようになった。そうなると、論理性は無視され、クレムリンに都合なカルト集団とか、ヘイトを煽る者たちをテレビのプライムタイムに登場させることで、国民をうっとりさせたり、気を紛らわさせたりした。それにつれて、クレムリンの手助けをし、そのヴィジョンを世界に広めるための金めあての雇われ外国人の数は、いつそう増えていった。

けれども、僕の進む道がずっと先でまたオスタンキノに戻ってくるとはいえ、膨大な量の台本が用意されている新生ロシアのリアルティー・ショーでまず僕がやらなければならなかったのは、視聴者がこの番組を西側のもののように観て聴いて感じられるよう手を貸すことだった。初めに僕が働いたテレビ局は、同じ名前のアメリカのテレビ局とはまったく関係がなかったがTNTと違って、ビザンチンと呼ばれる新しいビジネス・センターに入っていた。一階にはスパがあり、古代ローマ建築様式風に（漆喰塗りだが）ドーリス式円柱と遺跡で裝飾され、すらりとした脚のものうげな若い女たちがしばしば訪れては、日焼けした肌をさら

に焼いたり、延々とマニキュアやペディキュアを塗つてもらつたりしている。マニキュアのデザインは凝つていて、何色もの色を使い、何度も塗り重ね、キラキラした粉を振りかけながら、小さなハートや花を描く。私たちの退屈そうな眼差しよりもよほど輝いている。まるで爪と爪というちっぽけな空間に思いの丈のユートピアを注ぎこんでいるかのようだ。

テレビ局はこの建物の上層の教階を占有している。エレベーターのドアが開くと、TNTのロゴが目の前に現れる。目もくらむほど鮮やかで、歓声を上げたくくなるような三色でデザインされている。晴れやかなピンク、明るいブルー、そしてゴールドの三色だ。ロゴの上部に書かれているのは、テレビ局のキャッチフレーズの「わたしたちの愛を感じて！」これこそが必死で幸せそうにふるまう新生ロシアそのものであり、ロシアのTNT放送局のイメージだ。若々しくて元気がよく、一見華やかな国。テレビ局は躁状態の黄色とピンクの光線を、人々の暗闇に沈んだアパートに送っている。

オープンオフィスには、顔を輝かせた愉快な若者があふれていた。彼らは忙しそうに動きまわりながら、ロシア語にとどころイギリス英語の語句を交えたりしたし、イギリスのポップミュージックのヒット曲を口ずさんでいた。TNTはフリーガンの番組を制作しているし、若いスタッフは文化革命を起こしているんだという興奮でざわついていた。彼らにとってTNTは、体制破壊的なポップアートの一部であり、ロシア国民の神経に潜りこみ内部から神経を配線し直してやるための手段である。このテレビ局はリアリティー・ショーをロシアに持ちこんだ。ある卑猥な番組は——テレビプロデューサーにとってはこの上ない喜びだった——不道徳だとして年配の共産党員たちの厳しい非難を浴びた。TNTはロシア版の連続コメディと、アメリカの『ジェリー・スプリンガー・ショー』を真似たくだらないトーク番組を始めた。また、このテレビ局は西側テレビのアイデアにこれでもかとはかりに飛びつき、西側が一〇年かかって

考え出すよりも多くの番組の構成を、一年たたないうちにやつてのけるのだ。この都会のもつとも頭脳明晰なたくさんの人間が国家だのなんだのお堅い組織から離脱して、娯楽チャンネルのテレビ局や豪華な雑誌の出版社で働いている。ここでは、プロパガンダ活動を強いられることはなく、反体制的であることを勧められる。ただ、ここで本当の政治はできない。ニュースは放送しない場所だからだ。ほとんどの社員がこの取引に満足している。完全な沈黙に対して完全な自由が与えられているのだ。

「新しい世代がどんなことを考えているのか知りたいのよ、ピートル」

「どんなことに興奮するのかしらね、ピートル」

「画面で現実の人々を見たいと思ってるの。現実のヒーローをね、ピートル」

ピートル……僕のことをこう呼ぶのはTNTのプロデューサーたちだ。みなまだ二〇代の三人の女性。漆黒の髪の女性と、巻毛の女性と、ストレートヘアの女性がお互いの発言を受けて、話を続ける。彼女たちは僕の名前をロシア風に「ピートル」と呼ぶこともできたが、そうしないで、よりイギリス人らしく聞こえる「ピートル」と呼んだ。彼女たちにとって、僕はショウインドウに飾る西側の人間であり、そうなることで彼女らが見せかけの西側社会を作る手伝いをしているわけだ。そして、僕の方のメリットといえば、実際よりもはるかに敏腕なプロデューサーのふりができた。僕たちはまず、TNTにとって初のドキュメンタリー様式の番組を始めることにした。三〇分後に最初の仕事が回ってきた——『億万長者と結婚する法』ゴードンやニューヨークのためのガイド』。もつと頑張れば、フィルム三分は撮影させてもらえたと思う。ロシアの国営エネルギー独占企業、現時点で世界最大の天然ガス企業のガスプロムが資金を提供している。もとい、
「実際には世界最大の企業である。以上」というわけだが。

「わたしたちは経営理論から一つの大切な教訓を学ばなくてはなりません」と女性のインストラクターが話す。「それは、つねに消費者の欲望を徹底的にリサーチすること。お金持ちの男性を探すにあたっても、この原則を適用しましょう。最初のデートについては、きわめて重要なルールが一つあります。決して自分のことをしゃべらない。相手の話に耳を傾けるのです。彼を魅力的だと思う。彼の欲望を見つけ出す。彼の趣味を調べて、その趣味に合わせて自分自身を変えるのです」。

場所は「ゴールドディッカー・アカデミー」——大金持ちのパトロン探し専門学校というところかな。真剣な態度でブロンド娘たちが注意深くノートを取っている。「シユガー・ダデイ」（パトロンのことだ）を見つけることは特殊な技能であり、専門職なのだ。この学校は人造大理石でできた廊下が伸び、ほうぼうに丈の長い鏡がかけられ、金色で塗られた装飾が施されている。隣にはスパと美容サロンがある。パトロン探しのためのレッスンを受け、そのあとでワックスを塗ってむだ毛を処理し、日焼けをする。インストラクターは四〇代の赤毛の女性で、心理学の学位にMBAも持っていて、皮肉っぽい笑みを浮かべ、とりすました高い声で話す——ミニスカートを穿いた「ミス・ジーン・プロウディ」といったところか。「最初のデートに宝石を身につけて出かけてはいけません。あなたのことを貧しいと思わせなければなりません。あなたに宝石を買ってあげたいと思わせるのです。ぼんこつの車で行って、もっと素敵な車を買ってあげたいと思わせましょう」。

生徒たちは丁寧な字でノートを取っている。このコースを受講するには、毎週一〇〇〇ドルの学費を払わなければならない。このような「アカデミー」はモスクワやサンクト・ペテルブルクに数十校あり、校名も

「ゲイシャ・スクール」とか「ハウ・ツー・ビー・ア・リアル・ウーマン」といったそれらしい名が付けられている。

「高級住宅街に出かけなさい」とインストラクターは続ける。「地図を片手に持って、道に迷っているふりをしなさい。お金持ちの男性が近づいてきて、どうしたのと言ってくるかもしれないよ」。

「しっかりと自立している男性がいいわ。石の壁のかげに、いるのと同じぐらい安心させてくれるようなね」と言ったのはオリオナだ。この学校を卒業したばかりの生徒で、ゴールドディッガーたちがよく使う「並列言語」を使う（彼女が伝えたかったのは、金持ちの男が欲しいということだ）。普通だったら、僕とおしゃべりしようだなんて考えもしなかっただろう。というのも、彼女はいわゆる高嶺の花であり、僕なんぞは瞬き一つでいとも簡単に斥けるだろうからね。だけど、僕が彼女をテレビに出演させるつもりだとわかった途端、態度が一変した。番組名は『億万長者と結婚する法』になる予定だ。僕はオリオナに話をしてもらうのは難しいと予想していた。自分の生き方をさらすのはいやだろうと思ったからだ。ところが、まったく逆だった。世間に言いたくてたまらなかつたのだ。ゴールドディッガーの手法たるや、国の誰もが知っていたが謎の一つになつていた。書店には、億万長者をしとめる方法を若い女性たちに伝授する自己啓発本がずらりと並んでいる。ずんぐりとしたぼん引き、ピーター・リスターマンはテレビ界のセレブだ。彼は自分のことをぼん引きとは言わず（違法になるからだ）、「マッチメーカー」と呼ぶ。女性が彼に仲介料を払い、金持ちの男を紹介してもらうのだ。金持ちの男も仲介料を払って女性を紹介してもらう。リスターマンの代理人である一〇代のゲイの青年たちが鉄道の駅で、何でもよいから新しい人生を見つけようとモスクワにやってきた、脚の長いしなやかな身体つきの若い女を探す。リスターマンは娘たちを「ニワトリちゃん」と呼んでいて、写真撮影のときには鶏肉を刺したケバブの串を持ってポーズをとる。「ニワトリちゃんを追いかけているのなら、

私のところいらっしやい」と、広告で謳っている。

オリオナは新しくてぴかぴかの小さなアパートに臆病そうな仔犬と暮らしている。このアパートは、億万長者の街のルブレフカに通じる主要道路の一つに沿って建っている。こうした場所には、金持ちの男たちが帰宅途中に急いで立ち寄れるよう愛人を住まわせている。オリオナは、一九九〇年代に初めてドンバス地方からモスクワにやってきた。ドンバス地方は、マフィアのボスたちによって乗っ取られたウクライナの炭田地帯である。母親は美容師だった。オリオナも美容師になる勉強をした。ところが、母親の小さな美容室がつぶれてしまった。オリオナはほとんど無一文で、二〇歳のときにモスクワに出てきて、カジノの一つ「ゴールドデン・ガールズ」でストリッパーとして働き始めた。踊りがうまかったため、シュガー・ダディに見初められることになった。現在、彼女はモスクワで暮らす愛人の平均的な額を稼いでいる。アパートの家賃、月四〇〇〇ドルの生活費、自動車、年二回それぞれ一週間のヴァケーションをトルコかエジプトで過ごす費用をあてがわれている。見返りとして、シュガー・ダディのほうは昼夜を問わず、いつでも好きなときに、彼女のしなやかで日焼けした身体を自分のものにする。いつでも嬉しくてたまらない風を装い、いつでも進んで演技しなければならぬ。

「故郷の女の子たちの目つきを見るといいわ。恐ろしいほど嫉妬に燃えているんだから」と、オリオナが言う。「あら、訛りが取れて、すっかりモスクワっ子みたい」って、みんな言うわよ。くそくらえよ。自慢に思うだけよ」

「いつか向こうへ戻るつもりはないのかい？」

「ありえないわ。戻ったりしたら負け犬ってことになるもの。ママのところへ帰ったってことにね」

だが、シュガー・ダディは三ヶ月前に新車を買ってくれると約束したのに、いまだに届かない。オリオナ

は彼が自分と別れるつもりなのではないかと心配している。

「このマンションにあるものは全部彼のものなの。わたしのものは何も無いわ」。オリオナはそう言って、自分の部屋をじつと見つめる。そこがまるで舞台のセットで、そこに住んでいるのが別人であるかのように。

そして、シュガー・ダデイがオリオナに飽きた瞬間、彼女は追い出される。臆病そうな仔犬とスパンコールがついたドレスを一ダースだけ抱えて路頭に迷うことになる。だから、オリオナは新しいシュガー・ダデイを探している（彼女たちは「シュガー・ダデイ」ではなく「スポンサー」と呼んでいる）。したがって、「ゴールドディッカー・アカデミー」、ある種の成人教育の場に通っているというわけだ。

「だけど、どうやって他の男たちと出会えるのかな？　今のスポンサーは君のことを監視していないのかい？」

「ええ、だから気をつけなきゃならないのよ。いつもボディガードの一人にわたしを監視させるの。優しいやり方でだけどね。ボディガードは買ひ物のふりをしてふらつと現れる。わたしには、他の男と一緒にいかどうか調べているんだってわかる。彼はさりげなくやろうとしているのよ。親切なのね。他の女の子たちの話を聞くと、ずっとひどいんだから。カメラで監視されたり、私立探偵に尾行されたりするのよ」

オリオナの勝負の舞台は、若い女性を探すスポンサーと、スポンサーを探す若い女性のためだけに設計されたと言ってよい数々のクラブとレストランだ。男たちは『フォープス』誌の世界長者番付に名前が載っていること、から「フォープス」と呼ばれ、女の子たちは「仔牛^{オウロク}」と呼ばれている。ここは買ひ手市場であり、一人の「フォープス」に対して何十、何百という「仔牛^{オウロク}」がいるのだ。

その晩はまずレストランの「ガレリア」へ。道の反対側には赤いレンガ造りの修道院が、雪の降るなか、外洋航路をゆく船のように聳え立っている。このレストランの外には、黒塗りの車が狭い舗道と大通りに、

店を取り巻くように四重に駐車され、顔をしかめながら煙草を喫っているボディガードたちが、店の中にいる主人たちを待っている。ガレリアはアルカディ・ノヴィコフが立ち上げたレストランだが、彼のレストランはどの店も、モスクワでは行っておかなきやならない場所である（ノヴィコフはクレムリンへのケータリング・サービスも行っている）。それぞれのレストランが、中東とかアジアとか新しいテーマを持っている。模倣を寄せ集めたというよりは、誰かほかの人間のスタイルにヒントを得たと言った方がいい。ガレリアは援用されたもののコラーージュである。円柱、クロムめっきの黒いテーブル、イギリスのペイズリー柄の織物が貼られた壁板。テーブルは映画の撮影用スポットライトで照らされている。座席はどんなに隅にいる人も見渡せるように設計されている。そして、このディスプレイのメインテーマは女たちだ。彼女たちはバーのカウンターに座り、ヴォスのミネラルウォーターを注文するだけにする。フォーブスに「一杯やらないか」と誘わせるためだ。

「うふふ、あの人たちはすごく単純なの」と、オリオナ。「ああいう駆け引きにはそろそろみんな気づいていくけどね」。

彼女はカクテルとスシを注文する。「わたしはいつも、男の人からは何も受け取らないふりをするの。そうすればわたしに夢中になるからよ」。

真夜中、オリオナはいちばん新しいクラブに向かう。そろそろと進む黒塗りの（一台残らず黒塗り！）ベントレーとメルセデスの防弾になっている車のはなやかな列が、ゆっくりと入口に近づいていく。ドアの近くで、たくさんのステイレットヒールを履いた女たちがいつでもなぜか完璧なバランスをとりながら、黒い氷の上をすり足で滑るように歩いてゆく（さすがはバレエ王国だ！）。たくさんのプラチナブロードのふさふさした長い髪が、雪で湿ったむきだしの年中日焼けした背中をくすぐっている。たくさんのふっくらした唇から

出た叫び声が冬の空気をつんざく。女性たちが中に入れてくれと懇願しているのだ。ファッションいかにでなく、クールにやれるかどうかの話だ。つまるところ、これは仕事上の問題だからね。今夜は娘たちにとって、ダンスをして、お金とか私兵とか防犯用フェンスといった、いつもは近づけない壁の向こうを垣間見ることのできる一つの機会なのだ。北半球一の格差社会であるこの都市では、大富豪はフェンスを巡らしたなかで隔絶された優雅な文化的生活を送っているが、週に一晚だけはほんのわずかだけ天国への水門を開ける。すると、女たちはそのわずかな隙間にどっと押し寄せ、中に潜りこもうとする。女たちを閉め出してモスクワのしみつたれた街に帰らせる前に水門は一晚しか開かないことを、重々承知しているのだ。

オリオナは女たちの最前列へと軽やかに歩いていった。VIPリストに名を連ねているのだ。年の初めになると、ナイトクラブの用心棒に数千ドルを支払い、必ずいつでも中に入れてもらえるようにする。自分の仕事にたいする税金として支払う必要があると思っている。

クラブの内部はバロック様式の劇場そっくりで、中央にはダンスフロア、壁には開廊ロッジアが設けられている。フォープスたちは暗くした開廊ロッジアに陣取り（彼らはこれを楽しむために数万ドルを払っている）、一方のオリオナと数百人の女たちは下で踊りながら、慣れた目つきでロッジアを見上げては、上に呼ばれることを期待する。ロッジアは暗がりの中にある。誰がそこに座っているのかまったくわからないため、娘たちは影に向かつて媚びを売るのでだ。

「一八歳の女の子がとてもたくさんいて、わたしのすぐ後まで迫ってきているのよ」と、オリオナは言う。まだ二二歳だが、もうモスクワでの愛人としてのキャリアは終わりに近づいていることになる。「もうすぐ自分の基準を下げなきゃならなくなるってことはわかっているのよ」と僕に言うが、動揺しているというよりも、むしろ面白がっている。オリオナが心中を打ち明けてくれるようになって気づいたのは、彼女は僕が